



森のなかま

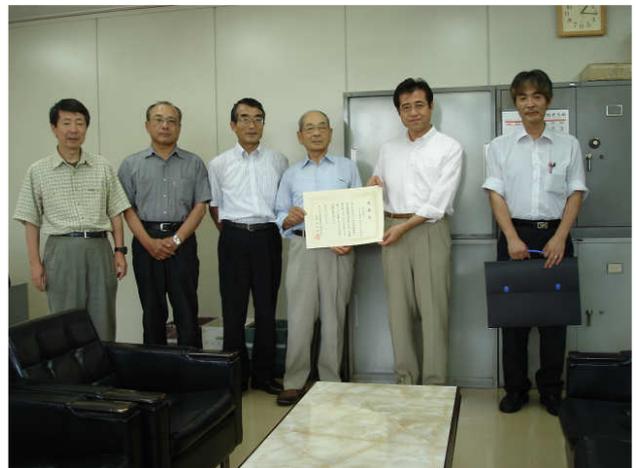
2010年 8月号

NO. 28 (継続173)

NPO法人かながわ森林インストラクターの会 <http://www.forest-kanagawa.jp> 発行人 島岡 功
〒243-0014 厚木市旭町1丁目8-14・グリーン会館 TEL046-280-4101・FAX046-280-4102

第61回全国植樹祭実行委員会から我会に「感謝状」! ＜委員長:松沢成文神奈川県知事＞

柏倉 紘 全国植樹祭担当理事



7月9日(金)厚木事務所において、島岡功理事長は下元省吾全国植樹祭推進課長から、植樹祭に関わる会の組織を挙げての協力に対する『感謝状』をいただきました。

「第61回全国植樹祭」における我が会の取り組みは表立ったものではありませんでしたが、豊かな国土をつくる第一歩となる(木を植える)作業に会員は誠心誠意取り組みました。その甲斐もあって、やむことのない雨に煙る山の中での植樹作業が、怪我・事故もなく終了できたこと何よりのことでした。

また、平成20年7月に「第1回森のリレーフェスタ・育樹のつどい」が相模湖畔林及び三井水源林(下刈り・自然観察会)で行われたのを始まりとして、全国植樹祭までの一連の事業に全面的に支援・協力したことも高く評価されたと耳にしております。

県は早期より国家的な一大行事に着々と準備を進めてきましたが、我が会も時を置かずして呼応し、全面協力・支援の意思を表示して実行体制をつくりました。

会が発足して18年、過去に例を見ない大規模な参加態勢をしき、当日は総括リーダーの指揮の下、127名の会員による「植栽地への誘導・植樹指導」に全力を尽くすことができました。この実績が会の大きな自信となったのは言うまでもありません。

今回の「感謝状」受賞は、本会が結束した組織力をもって貢献したことの証左と考え、今後さらなる活動をもって応えていかなければならないと意を新たにしました。

かながわのブナ林(帯)文化 ③

—箱根物産の課題—

飯 村 武

神奈川県自然、森林を語るときには、きまって丹沢、そして箱根と続く。当県にとって両者は自然の砦ともいえる地域で、これら2山地の象徴的存在がブナ林である。

箱根山地は海拔1,438mの神山を最高峰とし、古期と新期の各外輪山、それに中央火口丘の新旧3体からなる3重式火山で、それらの間に芦ノ湖などの湖沼と、早川、須雲川の2河川、早雲山や大涌谷の硫気孔、あるいは風衝の岩場が各所にあつて、地形的に変化に富んだ地域である。その面積は県土24万haの4%弱だが、植物の種数は約1,500種で、これは県全体の50%弱に及び、箱根に特有の植物相が形成されている。

植生は海拔約800mを境として、それ以下に照葉樹林帯が、それ以上に夏緑樹林帯が成立している。ブナ林は金時山、明神が岳、鞍掛山等1,000m級の山々を中心にモザイク的に形成され、植生的にヤマボウシ・ブナ群集として位置づけられている。現存植生図(神奈川県教育委員会、1972)によってその総面積を算出した結果、約1960haとなった。

我国では古くから、木地屋(木地師)と言われる人達が轆轤(ろくろ)を用いることによって、木材から盆や椀等、すなわち挽物等が作られてきた。原木としてはブナ、トチノキ、ミズキ、カエデ類等の落葉広葉樹が用いられる。植物帯の区分からすると、これらの樹種の多くはブナ帯に生育するもので、それ故に挽物等は、「ブナ帯に特有の物産」としてブナ帯文化の色合いをにじませている。

現在、箱根・小田原地方では落葉広葉樹を材料として箱根細工等の木工品類が作られている。これは、この地方の人々が長い歳月にわたって自然を見詰め、木の性質に応じて技を磨きながら制作してきたもので、今日では「箱根物産」と呼ぶようになった。

箱根物産のルーツは古く、文徳天皇の第1皇子惟喬(これたか)親王にさかのぼるが、「ろくろ細工」は1660年代(寛文)から木地屋達によって始められたという。このような生い立ちからすると箱根物産もまた箱根のブナ林(帯)から生まれ、地産の原木によってその伝統が継承され、育まれてきたのだろう。

箱根は鎌倉時代(1,190年～)以降交通の要所となった。ことに江戸時代(1,596年～)に入ると東海道が整備され、参勤交代を始め、道中客、湯治客などが増加し、道中土産、温泉土産として小木工品類が愛好される

ようになった。この頃からろくろ製品に限らず、指物技法による小箱類や寄木、木象嵌と言った装飾加工品類が制作されるようになって品物は豊富になり、今日では国内消費にとどまらず、サラダボールなどの台所・食卓用品がその販路を海外に広めつつある。

箱根物産は以上のような自然的、社会的条件の中でその地位を築いて行ったのだが、その元となる原木供給の実態はどうか。

小田原地方木工業界がまとめた樹種別の年間木材消費量(神奈川の林政史、1984)を見ると、樹種は17種で総量は61,146m³である。主な樹種について、総量に対する消費割合を見ると、ミズキが44,1%(26,754m³)で最も多く、ついでミヅメ12,3%、ホオ7,8%、ラワン7,4%と続き、ブナは2,8%(1708m³)である。

ブナは玩具、こけしに使われることが多く、原木の購入先としては神奈川県内(丹沢)もあるようだが、ほとんどは東北、北関東産で、地元箱根産はなく、その他の樹種も県外あるいは外国依存の度を強めている。

箱根物産は地場産業として発展してきた。地場産業とは「特定の自然的・歴史的条件をもつ土地において、地元資本が伝統的な技術と地元の労働力により、特産品を製造する産業」の意をもつ。箱根のブナ林(帯)で生まれ、花開いた箱根物産の今日的課題は明らかだ。原木を地元において調達することであり、そのための、森林育成を進めることである。それでこそ、箱根物産の伝統技術はいつそう輝くものとなるだろう。

森林インストラクターのための木工クラフト研修 森林文化部会 6月26日(土)

山下 剛史<11期>



森林文化部会の研修、第1弾として、会員向けに木工クラフトのイロハについて研修を行いました。イベントやネットワーク活動、森の案内人活動等で指導するときすぐに役立つ内容で中身の濃い研修でした。時折、小雨の降る天候のため、資材置き場の軒下に作業台等を置き、少人数で和気あいあいとして進めることができました。講師の落合氏、米本氏を中心に運営委員が持参した用材、道具、あると便利グッズ、資料を紹介していただきながら、用途にあう安全に配慮した使い方等の職人技の一端を伝授していただきました。午前中はキーホルダー、根付けのクラフトを中心に制作実習しました。ケヤキのぼっくり、竹製ミニ下駄の鼻緒のひもは裏で熱してつぶして留めよう。クルミの根付けでは、クルミの実を熱し、割り方から入り、中身を賞味できるおまけ付きでした。

開けた半片の穴開けに便利なグッズ・さき曲がりきりを使おう。書けない鉛筆は、2本分の長さで両端を削ってから、一本分に切り取ろう。のこぎり作業等には、万力、クランプを使おう。ドリル加工ではバイスや回転ストッパーの台を使おう。サンドペーパーはへらに貼り付けてやってみよう。等々といろんなアイデアをいただきました。午後は、米本講師を中心に「かなばのロケットラン」の作り方から遊び方までの指導をいただいた。薄いかんなの削り板を和紙ヒートシートで補強して、コルクシートを種(重り)として挟んで羽根を調整します。両面テープ、補強シールを使って軽量化を図って工夫できていました。

カタパルトはゴムをつけてロケットを飛ばす装置です。空に向けて一気に飛ばすと、想像以上に高く飛び、ひらひらと回りながら心地よく落下してきます。実際に見せたら、子どもたちの嬉々とした歓声が聞こえてくるようです。

さらに、マテバシイ、ムクロジ、ハンノキ、ヤシヤブシ等の木の実を使った人形を台木に立てて飾る、素材を提供していただきました。バイスを活用しよう。ポンドは少なめにして乾燥しやすくしよう。顔、模様は立てる前に描き込もうなど、アドバイスがありました。

この場では報告しきれない、アイデア、助言等たくさんあろうかと思いますが、講師の方々をはじめ運営委員、参加者の皆さんのたくさんのアイデア、秘伝の技、工具など惜しみなく出し合い今後の活動にいかせる有意義な研修になりました。なによりも、実際の指導の現場でいかし経験を積むことが大切であると、痛感しています。

日時：6月26日(土) 9時40分～15時

場所：やどりき水源林 休憩棟

講師：米本 力(2期) 落合洋右(3期)

参加・森林インストラクター

井出恒夫<1期>・菊池昭子<1期>

長谷山京子<3期>・佐藤武晴<5期>

武者 直<7期>・加藤 滋<8期>

松村俊和<8期>・飯澤 恒<9期>

小林保喜<9期>・高橋 修<9期>

後藤幸雄<10期>・杉崎恒三<10期>

中元秀幸<10期>・松山隆治<10期>

山下剛史<11期> 15名

私の認識

野鳥その80

高橋 恒通

スズメ目ホオジロ科の冬鳥中の冬鳥である。ユキホオジロ（漢和名：雪頬白、英名：Snow Bunting、体長L=16cm）をご案内します。

本稿が多くの方に読まれる時季は夏の頃、と言っても梅雨の最中かもしれません。夏に冬鳥の話も亦一興と思ってお読み頂ければ幸いです。

和名、英名共に“雪”が付いており、白色と基調体色とした小形の野鳥と覚えていて下さい。後ほど解説いたします。

私にとってユキホオジロへの興味と関心がトップレベルに達している最大の理由は、世界地図上での棲息分布域の広さであります。

図鑑で見て知ったのですが、北半球の全ての大陸に及んでおり、然も繁殖活動する領域がツンドラ地帯なのです。緯度で表すと北緯60~80度の極北の地域です。それも白夜の続く短い夏に限定されております野鳥の場合の一般論として子育ては潤沢な採餌が可能な期間に限られていると認識しています。

私の知る範囲ではツンドラ地帯での短い夏の平地では、雪や凍土の氷が融けて湿原の池塘の如き水面とそして蘚苔類の繁茂した陸地のモザイク模様になります。するとその水面に夥しい数の蚊や蠅が羽化し、水面を黒く蔽うそうです。蚊などは我々が日本で見かける藪蚊より大形だそうです。彼等はトナカイなどの血を吸って命を繋いで来てる様です。

ユキホオジロも雛の成長に必要な動物性蛋白質を“まるで地中より湧く如く”と形容されるこれら無数の小昆虫を捕食する事で補っているものと推察されます。但し私は現場を観た訳ではありませんけど夏のシベリアでカモを観察して来た鳥友の話に寄るとカモ達は凍土が融けしみ出た浅い水溜りの表面を黒く蓋う蠅の中を、嘴を開いて下向き加減にバシャバシャと駆け廻るのだそうです。すると蠅達が口の中にも沢山飛び込んで来るのでこれを食べて成長しているとの話でした。冬に日本に渡って来る数多くのカモ達が育つ根拠がこれならば、ユキホオジロにも当てはまるだろうと私は認識しております。

極北の地の短い夏が終り、雪と氷に閉ざされる長い冬にユキホオジロ達は越冬の為に北半球全大陸の寒冷地帯、即ち緯度で北緯40~50度位の領域に渡って来ます。我国では年によって数の多い少ないはあるものの北海道に毎年渡来するそうです。その他は東北地方の主に日本海側にも局所的に来るようです。

海岸や平地の草地などで地上を跳ね歩き乍らハマニンニクの種子を好んで食べ、他の草の種子も採食するそうです。

越冬期、即ち冬羽の体色は、♂が喉下から体半面、上尾筒は白色、頭頂から首うしろは白地に淡い褐色、背は濁白地に黒い斑と淡褐色、♀は♂より白色と黒色の部分が少なく全体濁白色地に褐色味が多い体色です。♂♀共に尾羽の先は黒く羽縁は白で、♂♀共に飛翔時の翼の先半分は黒に見えるそうです。

さて体色に絡まる余話ですが、繁殖地でのユキホオジロの天敵はシロハヤブサ（アイスランドの国鳥）だそうですが、共に名前から体色は白が基調色です。

食う方も食われる方も雪や氷の残る景色の中でお互いに保護色同士である点に興味があります。然し乍ら現時点で最も心配なのは進行の止まらない地球温暖化の流れです。

これら野鳥のみならず極北の地の動植物達は一体どうなるのか・・・と思うと今自分の出来る温暖化防止に役立つ事の実行あるのみです。



ユキホオジロ

<参考資料>

- ・日本の野鳥、山溪ハンディ図鑑7
写真・解説/叶内拓哉、分布図・解説協力/安部直哉、解説（鳴声）/上田秀雄
山と溪谷社
- ・フィールドガイド 日本の野鳥、野鳥ブックス②
高野伸二著、(財)日本野鳥の会
・鳥 630図鑑、(財)日本鳥類保護連盟
- ・日本の野鳥、山溪カラー名鑑、編 高野伸二。
解説 浜口哲一他、山と溪谷社
- ・ユキホオジロの絵・・・『春』<初登場>

活動短信

5/8～7/19

明治大学 M-Navi

「里山 ボランティア」

日 5月8日(土) 曇り
場 麻生区市民健康の森
参 大学生19名(男性10名・女性9名)

スタッフ 大学指導教授他5名

イ L清水⑧、永野⑥、宮下⑩、大塚⑪、福島⑪、
今回は、麻生区市民健康の森での里山ボランティア活動である。地元の活動グループによる活動状況の説明と今日の活動成果に対する大きな期待を示され参加学生達には一層真剣さが増しているようであった。

作業は、下草刈りと竹の間伐を90分2交代で実施し全員が2作業を体験した。中には家業が植木屋という作業経験者もいれば、初めて鎌や鋸を持った学生まで異種集団ではあったがさすが若さあふれる学生和気藹々相互に補い合って予定の活動成果を上げ、怪我もなく無事終了したことを確認し合い、夫々が心地よい疲労の中で充実感に暮っていた。(記 8期 清水)

森林リクリエーションとピザ作り

日 6月26日(土) 曇り 9時半～14時
場 小田原市いこいの森
参 一般参加者 27名

森林組合 佐藤

イ L伊藤⑦、横山⑤、鈴木⑤、大塚⑪
9時に管理棟前の広場に集合し、受付の後、1グループ6～7人構成の4グループに分かれ、主催者から行事内容、説明の後、各インストラクターと担当グループの紹介。ピザづくり作業内容と、森林散策の注意事項の説明があり、早速「ピザの生地づくり」に入り約一時間かけ、お子さん達も小さな手で粉を練り終え醗酵を待つ。

待つ間、午前中「広葉樹林コース」の散策を行ない、クヌギやコナラなどのドングリの木や、林に咲くヤブランの花を観察したり、山椒や三ツ葉の香を嗅ぎ、お子さんが多かったので五感を使って楽しく学びました。

昼食は、朝に仕込んだ「生地から作った釜焼きピザ」をいただき、参加者も大満足でした。

午後は小雨模様の中「針葉樹林コース」を散策、スギやヒノキを中心とした話をしました。

最後に、こども達と小川で「笹舟流し」で遊びましたが、雨も降ってきたので早めの終了となりました。終了後のアンケートには「楽しかった。もっと笹舟で遊びたかった」との満足の声が多く、充実した野外活動となりました。

今回は、幼稚園児から小学校低学年が多く、森のお話より昆虫やサワガニ探しに夢中になる子が多く、自然観察の面白さとむつかしさを感じました。(記 11期 大塚)

自然観察会

日 6月27日(日) 曇りのち雨
場 県立21世紀の森
参 横浜市能見台南小学校 5年生・127名
教師他 10名

イ L小沢⑨、島岡③、竹島③、渡辺③、森本⑤、横山⑤、杉戸⑥、鈴木⑥、山崎⑦、久保⑧、海野⑩、杉崎⑩、

バス3台の到着が少々遅れたが、駐車場にて児童の代表より挨拶が有り森林インストラクターの紹介を終え、生徒達とのコミュニケーションがスタートした。バスで内山橋付近の駐車場へ移動し、内山橋より風切りコースを12班に分かれ運動広場へ向け出発。コース内は湿度が高く水分補給をこまめにとりながら、植物の話や森林の働き、役割り等の自然観察を行った。

今回のコースで生徒達が一番目に入った事は、いたるところにクスサン(楠蚕)の毛虫(別名 シラガタロー)が異常発生していた事です。昼食時は雨と成ってしまいそれぞれ屋内での生徒達と班ごとの食事と成った。山方先生より雨が止みそうもない為、午後の自然観察は中止となり雨の中お別れの挨拶と成りました。

生徒達は植物や森林について非常に興味を持ち、又事故も無くお陰様で楽しい自然観察会を終える事が出来ました。(記 9期 小沢)

国立公園協会主催の尾瀬地域利用動態調査に参加

日 6月4日(金)～5日(土) 夜行日帰り
水芭蕉咲く尾瀬沼を楽しんできました。

参 小野⑦、愛木⑦、

尾瀬地区の数ポイントにて入山者に対して、入山口・交通手段・下山口・滞在日数(日帰り、夜行日帰り、宿泊)・利用ルート等の聞き取り調査を行い将来の木道等の登山コース整備計画策定の参考資料とするものである。

当地は平成19年に田代・帝釈山、会津駒ヶ岳地域を加え日光国立公園より分離、尾瀬国立公園として指定されている。同期の愛木氏も同行、総勢57名で大型バス2台にて、22時東京駅丸の内側出発、4時御池到着、シャトルバス乗換えで小雨降る沼山峠経由、尾瀬沼ビジターセンターに7時到着、小休止の後、尾瀬沼一周の散策に出発。当地には昭和36年から38年まで4回訪れているが最も変わった景色は沼山峠からの下り道、尾瀬沼と大江湿原を望む絶好のビューポイントが樹木の成長で全く昔日の面影が無くなっていることであった。当時の写真を持参していたので参加者にも見て頂き皆さんもその変化を実感したが、当然のことで50年近く経てば植樹しても相当な大木になる訳で景観が変わること自明の理でもある。

沼周辺の湿原は水芭蕉の花はほぼ見頃だがリュウキンカ・ショウジョウバカマはもう少し先の様である。この地も日光方面より鹿が多数侵入し水芭蕉や

ニッコウキスゲの芽立ちをついばむ被害が大きくその対応に苦慮しているとのことだが、花(苞)先を食われた水芭蕉やキスゲの若芽の被害を見ると尾瀬のトレードマークゆえ残念なことである。アンケートは1人当たり5~7人あて実施したが、私の聞いた相手は日帰り(夜行も含む)が7割近かった。

<我国の自然保護の原点><国立公園のトップランナー>と言われる尾瀬は1日の行動中私の気付いたゴミはアメ紙1枚だけでさすがと登山者や関係者の自覚と尽力に敬服した。一時期オーバーユースが懸念された当地も最近10年間では平成8年の647千人をピークに昨年は322千人と激減し、一部山小屋の休業や閉鎖が噂されている様だ。

以前の、木道一杯・長蛇の列、先頭ジャンケンの風景が見られなかったことには一抹の寂しさも感じた。帰路は三平峠経由大清水まで、約2時間の行程で大清水よりバス、途中片品温泉での入浴の後、定刻20時東京駅に到着した。

(追記)当国立公園協会主催のボランティアは今後夏から初秋にかけて、八幡平・奥日光・鹿沢高原などで実施の予定です。(記 7期 小野)

「平成22年度 川崎市里山ボランティア育成講座」 中級編・第二回

日 7月3日(土)曇り
場 宮前消防署・宮前第4公園(川崎市宮前区)
参 一般市民 22名(男性15名・女性7名)
スタッフ 川崎市公園緑地協会・川崎緑レンジャー 8名

イ L松崎⑤、佐藤⑤、渡辺⑧

川崎市公園緑地協会が実施する「里山ボランティア育成講座」シリーズ平成22年度の第二回目。今回は午前中、宮前消防署で救命士の高野さんから救命処置の講義を受けた後、全員で人工呼吸の仕方・AEDの使い方について実習した。我々スタッフ・インストラクターも含め33名全員が汗だくになって真剣に実習した。実習者には後日市民救命士証が交付される。午後は場所を変え、宮前第4公園でアズマネザサの下草刈を行った。はじめに当公園の活動団体の紹介があり、続いて松崎が「下草を刈る理由・鎌の使い方」について講義、その後3班に分かれ、インストラクターおよび川崎緑レンジャーの指導のもと、約90分間斜面に伸びたアズマネザサを刈り取った。全員怪我も無く終了、鎌研ぎ・後片付けをして15時30分解散した。第三回は9月4日に麻生区岡上で、講義「ボランティアについて考える」、講義「里山作業のいろいろ」、作業「植樹後の整備・間伐・枝打ち」などを行う予定。(記 5期 松崎)

「平成22年度 川崎市里山ボランティア育成講座」 入門編・第二回

日 7月4日(日)晴れ
場 菅馬場谷特別緑地保全地区・まほろばの杜
参 一般市民 14名(うち子供4名)

スタッフ 川崎市公園緑地協会ほか6名

イ L清水⑧、相馬⑤、横山⑤、伊藤⑦、金森⑩
大橋⑪、

計六回講座の第二回目。最寄り駅から地図を頼りに集合場所まで徒歩15分、場所が難しく、個別に向かうため迷う可能性はあるが、これも講習の一環。参加者はほぼ時間通りに集合できた。

刃物の扱い方・研ぎ方について川崎マイスターから講義を受ける。フィールドに移動し、改めて草刈鎌の研ぎ方・刈り方の実演を見る。現地で活動する団体「まほろばの会」からフィールドの説明・注意事項の後、班に分かれて作業を行う。作業は鎌で笹を刈る、慣れたところでアオキ・シュロなどにも挑戦、鋸にも慣れる。鎌は初めてという参加者が多かったがコツを掴んだようで、作業の終盤「結構面白い」という声が聞かれた。熱中症に気をつけながら子供たちも親を見習いながら作業。最後に使用した鎌を研ぐ。

笹を刈って見通しが良くなった雑木林でフィールドゲームを行う。予め選んだ色に似たモノ(葉っぱやキノコなど)探しや動物カード探し、得点を競うものでは大人も子供も夢中になり大喜びであった。

(記 10期 金森)

プリウス森木会の間伐体験会

日 6月26日(土)
場 やどりき水源林
参 神奈川トヨタ自動車(株)社員12名・
ユーザー26名

自環保 2名

イ L宮本④、山崎⑦、小野⑦、金森⑩、

当初予定日5月29日が天候不良で当日に延期されたもので、雲行き怪しいながらも決行された。間伐と自然観察(水生生物観察とコース散策)の2グループに分かれ、夫々午前午後交代で参加者全員が両方を体験することとした。間伐はその意義と必要性を説明後森木会ヤードにて全員で伐倒・枝払い・玉切りを行い、一部コースターとして持ち帰った。

水生生物はカジカも含め10種ほど採取し、子供達は大喜び、その後Bコースの散策で午前の予定終了。昼食後、雨が強くなり協議の結果、集会棟での丸太切りと林道散策に変更、間伐希望の方々も天気と安全の為の変更ゆえ快く了解して頂いた。

同社スタッフによる詳細な計画書に沿った活動は後半雨となるも無事時間内に終了した。

(記 7期 小野)



自然観察部会主催：ブラッシュアップ研修 ＜虫こぶ探検＞

日 7月4日(日) 晴れ、
場 座間谷戸山公園
参 会員 35名

「虫こぶハンドブック」や「虫こぶ入門」の著者で東京環境工科専門学校の校長先生を勤められた薄葉重先生をお招きして、昆虫の一番無防備で蜂や蜘蛛、小鳥などの天敵から狙われやすい幼虫時代を、植物の袋の中の3食昼寝付きの宿「虫こぶ」の研修会。

タマバエ、タマバチ、アブラムシなどの虫たちが、自分たちの好きな芽、葉、花、茎、根などに卵を産みつける。卵を産みつけられた場所の細胞は刺激を受け異常増殖や肥大し膨み、あるいは、発育不良で縮れたりして幼虫を包み込む。袋で隔離された場所で快適に幼虫の時代を過ごし生き残れるように工夫・進化したことなのだが、この安全と思われる場所でも、寄生するものに狙われたり、自分では巣を作らず他人の巣を利用するものなど、その上を行くものなども現れている。

一方、植物にとってはどうなのであろうか。虫こぶは大きくなると形が目立ち、さらにきれいな色がつき外敵から目立つものも多い。これは植物の自衛手段であろうか。それとも、植物は生産者としての立場から仕方なく受け入れているのであろうか。

目立つ虫こぶは、エゴノネコアシ、ヌルデミミフシ、ハクウンボクエダサンゴフシのように特殊な形になるもの、葉っぱの表面にでき綺麗に色づく2-3mmの丸い玉のクヌギハマルタマフシ、茎にいが状にできるクヌギエダイガフシ、通常の果実の2-3倍の大きさになっているキズタツボミフクレフシなど、注意深く観察するといろいろな場所に3食昼寝付きの宿が見られる。

人間も虫こぶを利用するものの一人です。虫こぶには沢山のタンニンが含まれていることを突き止め、染料、インク、皮のなめし、食料、お歯黒などに昔から利用して来た。

こんな話しを、実験を含め講義と観察とおし勉強しました。お蔭様で自然観察のネタが一つ増え、これからの観察会が待ち遠しいです。

(記 8期 野田)

森林づくり体験講座A

日 7月10日(土) うす曇り
場 相模原市津久井町鳥屋・魚止めの森
参 30名(男性 19名・女性 11名)
講師 佐藤好延 (有) サトウ草木社長
地元 津久井郡森林組合・相模原市緑の協会
財 高橋課長・長島・
イ L清水⑧、堀江④、塩谷⑦、植松⑧、松山⑩、
海野⑩、**研** 山下⑪、大橋⑪、
看 廣島

心配された雨の心配もなく参加者一同元気にバスに乗り込む。現地まで1時間余り、バスの中で植栽木の写真が回覧され、葉形の確認に有効であった。

現地は、切り株・岩・間伐材が転がっている足場の良くない緩斜面地で、植栽されて3年目草木の勢いがよくその殆どが埋もれている状態であった。

財団挨拶の後関係者、看護師、各班担当の紹介の後服装、身体状況の確認、用具、使用法を説明し準備運動をして作業開始。参加者に初心者が多く、足場の悪さと相まって作業は意外に難航したが11時50分無事作業終了。山ヒルの被害者は、1人だけだった。

昼食後、魚止め森の家で「水源林と地域とのかわり」について佐藤講師から講義があった。講師の実体験をビデオを通して解りやすく紹介され参加者一同「森林の大切さ」を再認識し納得して講義終了。

帰りのバスは、静かに本厚木に！ 3時50分解散
(記 8期 清水)

県民参加の森林づくり活動

日 6月26日(土) 8時半～13時30分 曇り
場 南足柄市風切水源林
参 一般県民 78名(男性66名・女性12名)
財 古館、永島 **研** 森林組合 志村 **看** 小林
イ L水津⑨、稲部⑤、戸谷⑥、宮本⑥、安藤⑦、
鈴木敏⑧、草野⑧、上田⑩、小笠原⑩、松本⑪、
研 川喜多⑩、真貝⑪、佐藤一⑪

重たい雲が空一杯に広がり、今にも泣きそうな天気のもと、一路バス2台は現地に向かった。作業地の様子や作業方法の説明等はリーダーが行った後、戸谷さんによるストレッチ体操をして作業地に入る。歩いて10分程度のところである。昨年に引き続きの場所で昨年は下草刈り前の竹の除伐で大変だったようだ。

今年はおかげで比較的スムーズに下草刈りができた。窪地から尾根に向かっていくのでとても蒸し暑い。しかし、振り返ると草刈り後はすっきりして気持ちがいい。中学生のグループも元気よく作業を行っていた。リピーターが多く作業も順調に進んだ。暑さのためか少々熱中症気味に見られたので水分補給をしたり、ヘルメットを外して休憩したりして様子を見ながら下山させた。

入山時と同じく下山時も人員確認をして班の前後にはインストラクターが立たなくてはと思った。昼食後は水津リーダーがパネル等を利用してスギ、ヒノキの需要の変遷や山作業のミニ講座があり、参加者は真剣な面持ちで受講していました。(記 10期 小笠原)

募集「やどりき水源林での森林癒し体験・研修会」

日時：8月29日(日)＝予告済み
9月12日(日)＝追加実施

両日とも、ほぼ同内容で実施現地9時半～14時半

内容：午前＝各種プログラムの体験

午後＝癒しスポットの調査・検討 整備に向けての研修
持ち物：レジャーシート・弁当・飲み物・

研修参加費500円

問い合わせ・申し込み：高崎まで 090-2317-2981

顔合わせ会後、やむなく変更有の部会員も早めに連絡を
その他：参加確定者への追加情報等は後日メールで

**やどりき水源林
ミニガイド**

7月のトピックス



樹洞からムササビくんが、顔をだしていました。

8月の水源林

美味しい鹿シチュー



8/21・水源林のつどいがあります。

「森の案内人」情報

- 実施時間：毎週土曜・日曜・午前10時・午後1時1～2時間程度（12月1月2月休止）
- 集合：水源林入口ゲート前
- 内容：森林インストラクターが自然観察にご案内します。森林のしくみ・手入れなどについて説明いたします。参加自由、参加費無料
- *10人以上の団体は事前に下記までご連絡ください。
- 問合せ：(社) かながわトラストみどり財団 TEL:045-412-2255 fax:045-412-2300
- ホームページ：<http://www.ktm.or.jp>
- E-mail:midori@ktm.or.jp
- やどりき水源林までの道順
小田急線新松田駅または JR 御殿場線松田駅下車、富士急湘南バス「寄（やどりき）」行き乗車約25分。バス下車後（案内板あり）川沿いに徒歩35分。寄大橋の右横が水源林ゲートです。

イベント情報 & ご案内

**ミニ火山を作ろう
(室内実習)
県立生命の星・地球博物館**

砂と食用廃油を使つての噴火実験で、各グループ1日かけて目標の火山を作ります。
① 8月23日(月) ②24日(火) ③25日(水) 各10時～15時
2～6人の家族などのグループ 各回10組 **〆きり8/10(火)**
★講座名・開催日・住所・参加者全員の氏名・年齢・TELを明記の上往復ハガキかホームページで申し込みください。〒250-0031 小田原市入生田 499

◇森のなかま原稿募集◇

会員・購読の皆様からの原稿を募集しています。写真、スケッチなども募集しております。

送り先

<①電子配信希望>

森 義徳
〒232-0053
横浜市南区井土ヶ谷下町16-3-202
Tel/090-5433-7784 Fax/<株リコー・森宛 045-590-1910>
Mail: myforest@yha.att.ne.jp

<②メール及び手書き原稿・送り先・>

【本誌】村井正孝
〒226-0002
横浜市緑区東本郷6-22-1-420
Tel/Fax: 045-476-4112
Mail: murapu60dai@yahoo.co.jp
【別冊】金森 巖
〒227-0038
横浜市青葉区奈良2丁目10-5
Tel/Fax: 045-961-6695
Mai: i_kanamori@morinotabibito.com

【CCで】森本正信
〒194-0001
東京都町田市つくし野2-13-7
Tel/Fax: 042-796-6011
Mail: morimoto@bikkuri.co.jp
原稿の締切は毎月20日です。

編集後記

★この夏、親子向け里山活動や親子向け昆虫探しとその解説のインストラクターを担当しますが、勉強して準備することが多く、我々の活動も高度かつ多様化しています。森林整備と同様に情報を共有化していかなくてはなりません (金森)

★梅雨明けを狙って、日本屈指の登路、黒戸尾根を登り、甲斐駒ヶ岳、大快晴の朝8時に登頂まだまだ頑張れる。懐かしの山々が、近く遠く360°広がった。健康って素晴らしい。ALPSは招く。頑張るぞ。(鈴木松)

★最近、電子配信読者から、さまざまなご意見を頂けるようになりました。今後もより良い電子配信のため皆様の貴重なご意見をぜひ、頂戴したいものです。よろしくお願ひいたします。(森)

★夏にデビューしました。金鳥の夏と言いますが、私も緊張しっぱなしなんです。よろしく><。(春)

★夏も本格的。しかし今年はセミの鳴き声あまりしないようですが、こんなものでしょうか。そのうちうるさく鳴き始めるのかな？(井出)

★こしばらく丹沢の森から足が遠のいています。森の中のみずみずしい空気がふとたまらなく恋しくなります。(鈴木朗)

★初めてヤマビルに純血を吸われてしまいました。今夏ヤビツの森での真昼の決闘で決着つけるぞ！(村井)

◇年間購読のお申し込み

「森のなかま」年間購読をご希望の方は、郵便局備付けの郵便振替を利用してお申し込みください。

郵便振替口座 00230-0-2454

かながわ森林インストラクターの会宛まで購読料年2000円をお振込みください。振替用紙には、必ず、住所、氏名を明記してください。

振替用紙到着の翌月号から12回/1年間お届け致します。

(頒価 200円 送料共)

編集人：村井正孝

広報部：井出恒夫 (HP) 金森 巖

鈴木松弘 森本正信 森 義徳

鈴木 朗 上野潤二 原田智也

『春』

第6回 自然体験ツアー 7/19 (月 祝)

“たたき網を持って、草むらで昆虫を探そう①”

- 場 県立21世紀の森
- 参 36名 (大人16名・小学生18名・幼児2名)
- AGS あっきーさん (布施) 木津さん
- イ 金森⑩

この夏2回開催の第1回目、梅雨が明けて間もない猛暑、大人も子供も汗だくになりながら竹を削り、布を張ってたたき網を作る。布の隅が破れやすいというハプニングはあったが、グリーンサービススタッフの職人根性で昼休み中になんとか修復する。午後は昆虫探しに出発、よく管理されているため草むらが少なく虫が見つからない。それでもたたき網(布)に落ちた小さな虫をレンズ付カップで観察する。怪我や熱中症もなく感想は上々。(記 10期 金森)

**活動短信
番外編**